

はじめての 開高健

vol.2

開高健の言葉を味わう

ひきたよしあきさんに聞く!
開高健の言葉の魅力

ヤマザキマリさんが語る
もがきつづける開高文学

開高ファン11人による
ブックガイド

行ってみたい!
開高健を訪ねて

漂えども沈まず。



言葉の味を味わおう

漂^{シヅ}っても、悩んでもいい。浮き上がらなくても、沈まないでいればそれでいい。パリの市の紋章にあるこの言葉を開高も愛した。パリの歴史を振り返れば、負け続きではあったものの敵の文化をのみこんで大きくなり、それがパリをパリたらしめていった。だから漂^{シヅ}ってもいいのだ。といういろいろなところで開高は書いている。原文は「FLUCTUAT NEC MERGITUR」(「うらたんと語で、」揺れても沈まず」と訳されることもあるが、開高は「漂^{シヅ}えども沈まず」とした。あまりに老いてからでは漂^{シヅ}いたくても漂^{シヅ}えない。漂^{シヅ}える若さのあるうちに、ぜひ味わってみたい言葉である。

漂^{シヅ}えども沈まず

悠々として
急げ

わかってはいるけど動けない。気持ちはあるけど向かない。誰しもそんなことがあるのではないだろうか。こんなとき、ただ「急げ」「早くしろ」と言われても、やはり動く気にはなれないだろう。でも「悠々として急げ」と言われたら？ この言葉には現状を肯定してくれる包容^{ほうゆう}力があり、「がんばれ」「急がば回れ」のような説教臭^{せつこう}さもない。誰一人傷つけることなく「急げ」と言えるのだ。「コピー」としても、反対語を配置することで矛盾しながらも心の景色が見える、実に印象的な一文になっている。「コピーライター」でもあった開高の筆力^{ひつりき}に唸^{うな}られる名句である。

開高

まずは開高健が愛した名句・警句をご紹介。短いながらも突きささる言葉がたくさん。開高が誰かを、そして自分を励まし鼓舞^{こぶ}するために使った言葉とは。そこから、彼がどんな人なのかも見えてくるはずですよ。

言葉のセレクト・解説／ひきたよしあき (プロフィールは6ページ)

絶望の淵^{ふち}にいてもなお、日常茶飯をすることの大切さ。この言葉はそれを美しく表現している。元は神学者マルティン・ルターが「もし明日世界が減^へびるとしたらどうしますか？」と尋^{たず}ねられ、「今日、私はリンゴの木を植^うえる」と答えたものから。それを開高は「あなたは」「君は」と書き換えて使った。「失恋しても、今日僕は歯を磨く」でも「志望校に落ちたとしても、今日私は単語を覚える」ともいい。とにかく、絶望の淵^{ふち}にいるときこそ淡々と日常をこなすことが大切だということだ。書こうとしながら書けず、も

がき続けた開高らしい言葉でもある。

ゲーテのこの言葉を

開高も好んで引用し、若いときに旅をすることの重要性を説いた。今は、コロナ禍を経たことや、バーチャルの世界が驚くほど充実^{ちゆうじつ}したことで、かつてより人々の旅への渴望^{かぼう}はなくなりつつあるのかもしれない。しかし、リアルな世界を知ることの重要性は計り知れない。また、20代の頃の貧乏旅行と、中年以降、ある程度お金に自由が利くようになってからの旅行とでは見える景色も違う。その年齢にしかできない旅というのがある。こんな時代だからこそ、「普段とは違うリアル」に触れる旅を、若いうちにしておきたい。

明日世界が
載^のるどころも
今日あなたは
リンゴの木を植^うえる

若^{わか}きの日に
旅^{たび}をせよば

老^{おい}いこの日に
何をか、
語^{かた}るる。

小説は 形容詞から朽ちる

小説『輝ける闇』のなかで開高は「小説は形容詞から朽ちる。生物の死体が眼やはらわたから、もともとも美味な部分からまっさきに腐りはじめるように」と書いている。形容詞は「見わかりやすくキマキマしているため、つい使いたくなる。キャッチコピーやS・P・チ、SNS等でもつい表現を盛りたくなる。だが、形容詞を並べただけでは実は何も言えていないということも多い。開高の描写には動詞が多い。あれかこれかではなく、あれもこれもと重ねた動詞の塊。その圧倒的な表現力が私たちを彼の世界へと引きずりこむ。すぐに腐ってしまう眼やはらわたではなく、その文章の骨は何か、文章を書くときにはそこを考えたい。

おだやかなることを 学べ

匿名で発信できるネット上では言葉はどんどん過激になる。さらに悪いことには、過激なほうがバズったりもする。リアルの世界でも、言葉が少なく言葉の粒度が粗いとやたらときつい物言いが増え、無闇に傷つけ合ってしまうことが多くなる。この言葉は、イギリスの伝記作家アイザック・ウォルトンが『釣魚大全』に記した「STUDY TO BE QUIET」からで、これを開高も自著『私の釣魚大全』の最後に記した。釣りの極意を示した言葉でありながら、いかなるときも戦闘モードにならず、おだやかでいることの大切さを学べる普遍的な箴言しげん。今の日本に「一番必要な言葉かもしれない。

教えるものが 教えられるのが 教育の理想である。

釣り師としても知られる開高は、編集者に釣りの手ほどきをしたこともあった。この言葉は、釣り師として巣立つ彼らを見た開高が記したものだ。また、遺作『珠玉』では少々エロティックな場面で登場する。全く異なる場面で使われながら、この言葉は教育の核心をついている。「教えるものが教えられる」ことは最高の敗北であり、最高の勝利であるはずだからだ。「常に自分は教える側」と教育者が思っている教育にあまり未来はない。教える立場の人間はそう肝に銘じ、教わる立場にある人は「自分も教える側にまわれる」ということを忘れないでほしい。

ライオンはライオンと 名づけられるまでは えたいの知れない 凶暴な恐怖であった。

何だか「モヤモヤする」というとき。モヤモヤのままではどうしようもないが、それが怒りなのか不安なのか、また、何によって起こったのかわかってくれば対処しようがある。「何だかのどが痛い」が、医師によって「扁桃炎扁桃炎」だとわかると処方箋がもらえて少し楽になるように。開高はエッセイ『風に訊け』のなかで「火とか、棍棒とか、弓とか槍とかいう道具と同じくらの動きを言葉がしている」と書いている。モヤモヤの正体をつき止めるために必要なのは「これは一体何なのか」と考える力であり、それを支えるのが、正体をずばりと規定する言葉の力ということなのだろ。

量は質に転化する という哲学の命題も ある

何でもネットで手軽に調べられ、ChatGPTが答えを出してくれる現代、タイプ至上主義も相まって、とにかく自分で時間をかけて教をこなすという行為はますます敬遠されるようになった。しかし、とにかく量をこなすことが必要な時期というのやはりある。この言葉は『もつと広く』の中で登場し、食通としても有名な開高の食への哲学としても実践され続けた。古今東西のあらゆる食べ物や酒を嗜みこぼ、一つの食べ物をこれと決めたら食べ続けることもした。効率はかりが求められる今だからこそ、「量」のもつ威力をあらためて思い出して、おきたい。

ひきたよしあきさんに聞く！

開高健の 言葉の魅力

言葉の乏しい時代だからこそ

言葉の多い開高健が面白い

今はSNSが人々の生活に定着し、誰もが広く言葉を発信するようになりました。ならば言葉は豊かになったのかといえば、むしろその逆だと思います。「やばい」「うざい」など平易で使いやすい言葉ばかりがあふれ、ほんの一言でしかしやべれないという人が増えてきました。言葉の粒度が粗くなり、自分の思

いも伝えられなければ、相手の思いもわからない。テクノロジーが発達したぶん、逆にそれで見せればいいやと言葉が貧弱になってしまったのです。

語彙力が乏しく、使える言葉の数が少ないということ、迷う一方になるということ、自分の置かれた状況を整理したり、悩みの正体を突き止めたりするにはそれを規定する必要がありますが、それは言葉によってこそできることだからです。言葉の乏しい時代だからこそ、

言葉の多い人が面白い。今こそ、開高健の言葉が生き、多くの人の生きる世界を楽にしてくれるのではないかと私は思います。

文豪ではなく知識人・行動家。

肩書きは「開高健」

開高さんと私の最初の出会いは大学時代。当世人気の「週刊プレイボーイ」の読者相談コーナー「風に訊け」でした。そこでの開高さんの回答がどれも驚異的な語彙力と表現力にあふれている。とにかくあれもこれもと言葉を尽くす。豊穡にして広大無辺、博覧強記の名答ばかりで毎号夢中になって読んだのを覚えています。

当時の私にとって憧れの「兄貴」のような存在だった開高さんは、私より一つ上の世代です。1930（昭和5）年生まれで、亡くなったのは1989（平成元）年。まさに昭和の時代を生ききった人でした。来年で昭和100年を迎える今、「昭和的価値観」にメスが入れられつつあります。しかし、昭和が全てダメだったのかといえはそんなことはなく、もちろんよい面もあった。時代背景を踏

まえつつ、「陽」の昭和を担ってきたものとして開高作品を見ていくと、そこには世代を超えて響くものがあり、必ず発見があるはず。また、開高さんをいわゆる「文豪」と捉えようと少し違ってしまうのではないかと、とも思っています。なぜなら一つには、彼が超一流のコピーライターであったから。そして一つには、「風に訊け」に見られるように、政治ネタから下世話ネタまで何でも斬っては鮮やかに解決してくれる、頼れる「兄貴」だったから。

開高さんはもちろん小説家だけれど、記者としてベトナム戦争に行ったりポモ書いたり、釣り師としても食通としても有名です。あれかこれかではなく、あれもこれも何でもやった。時代の寵児だった。その意味では、日本の文豪というより、哲学者でも小説家でも演劇人でもあったサルトルのような存在に近いのではないかと思います。実際、開高さんはサルトルに会いに行っています。

知識人・行動家、肩書きは開高健。ネットのない時代に地球の裏側まで行き、大魚と格闘し、実地し、見て聞いて食べて飲んだ人。そんな開高さんの書いたもの



ひきたよしあき

1960年生まれ。大阪芸術大学客員教授。コミュニケーションコンサルタント、スピーチライター、コラムニスト。(株)SmileWords代表。大学などで教鞭をとる傍ら、「言葉」にまつわる書籍を著すなど広く活動している。

は、今のようない時代だからこそ胸を打つものがある——。私はそう確信しているのです。

言葉の世界で生きる私の

ベースをつくった人

私は大学卒業と同時に広告業界に入りましたが、それは開高さんがサントリー宣伝部のコピーライターだったと知ったからです。私も開高さんのようなコピーが書きたいと思ったのです。そうしてスピーチライター、コラムニストとなり、今は会社を立ち上げて、小学生から校長先生、スポーツ選手から僧侶の方々まで幅広く、「言葉の力」について伝え、教える仕事をしています。

40年以上言葉に携わる仕事をしてきたわけですが、まさにそのきっかけとなり、今の私のベースをつくったのが開高さんだったのです。出会った当時も今もずっと、彼が一つの指針です。

開高さんから教えてもらった言葉の力を、私自身の栄養としながら、これからもより多くの人に伝え、広めていきたいと思っています。

もがきつづける 開高文学



赤ではなく「緋色」を

表現してくれている作家だった

私が開高健の作品と初めて出会ったのはイタリアに留学し、美術を学んでいた10代終わり頃のことです。日本文学を自国語で読みたいと家族に頼んで送ってもらった本の中に、開高作品がありました。当時、日本はバブル絶頂期。でも私は、毎日貧困と向き合い、創作の苦しみの中にいた。それゆえ、圧倒的な苦悩と経験

値と読書量に裏打ちされた、開高作品のような文学に惹かれたのです。

開高作品を読んでいると、私を感じている、いかなる些細な感覚とも共鳴が叶うと感じることができた。例えば私が「これは赤ではなく緋色だ」と感じる色も、私と経験値を共有していない人にとって赤色にしか見えないわけですが、開高作品の中にはきちんと緋色という色彩が見えてくる。それで心の奥深くに刺さったのです。

ヤマザキマリ

1967年生まれ。漫画家・文筆家・画家。東京造形大学客員教授。2010年に『テルマエ・ロマエ』でマンガ大賞、手塚治虫文化賞短編賞受賞。ほか、漫画、著書多数。現在、『続テルマエ・ロマエ』を「少年ジャンプ+」で連載中。

Photo_ノザワヒロミチ

「強い女」をリスペクトをもって描ける

一番好きな作品は短編の「玉、砕ける」。これはベトナム戦争に記者として従軍した開高さんが、その帰路に立ち寄った香港での体験が元になっている。「玉」とは垢すりで出た自分の垢を丸めた玉のこと。それが「砕ける」というだけなのですが、この玉は人間が生み出した時間と経験、人間が費やした精神力と時間の象徴のように描かれている。生きることももがき、幸せや徳を信じて頑張る人間の脆さの表現としては秀逸だと思いました。

また『夏の闇』も、強く心に刻まれた作品です。作中には開高さんと思しき男性と、不倫関係にある女性が出てくる。しかし、この物語は不倫小説などではなく、もっとという男女の話ですらない。墮落しきって動けない男。すでに満身創痍ながら傷つくことを恐れずひたすら前進する女。たまたま男女の設定ですが、これはどちらも繊細さと大胆さを持ち合わせた彼自身のことであり、彼の2つの面を分けて表現したにすぎない。

だからこそ、「強い女」を強烈な主観性

で描きがちな男性作家が多い中、開高さんはその強靭さを、リスペクトをもって描ける。女性に対して「こうあるべき」的な偏見も幻想もないからこそできることで、そこが彼の最高にかっこいいところだと思えます。

燃費の悪さこそが

すばらしいものへと結晶した文学

開高さんはさまざまな事象を、自分の見たいように見られる人ではありませんでした。人には、自分の幻想が壊れそうになるとそれを感じさせなくする装置が備わっていると思うのですが、開高さんにはそれが無い。だから記者のような仕事もできたわけですが、彼のような作家は満身創痍でポロポロになってしまふ。

人の心を打つ表現はお花畑の中からは生まれません。絶望や悲しみなどが結晶して出てくるものです。開高文学は、散々傷ついた人の生む文学なのです。にも拘らず、弁解じめることなくきちんとユーモラスに昇華し、心細かろうと不安だろうと、人生そんなもんだと捉えて構えていく。そこも最高にかっこいいのです。

開高さんの生き方は燃費がいいものとはいえませんが。コスバや省エネが叫ばれる現代からしたら信じられないでしょう。また、コンプライアンスが叫ばれる現代では疑問視される表現もあるでしょう。でも、開高文学は燃費が悪くなければ出てこない、鮮烈で質感のある世界観に溢れた文学ですし、そこから得られるものは必ずあるはずですよ。

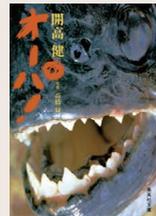
傷つくことは燃費が悪い。今はコスバの悪いものを排除し、人もコスバで判断する。自分とは違う人を異分子として排除する。でも、コスバだけを考え、傷つくことを全部やめたら人間は確実にバランスを欠いてしまいます。

文学作品を読むことの一つの効能は、作中で傷の軌跡みたいなのを習得すること、自分が生きるうえでの助けになり、思想の孤立化による心細さを払拭できることでしょうか。言語化の難しい感情が潜んでいるのなら、SNSの中にそれを探すのではなく、開高さんくらい大胆かつ繊細に物事を表現できる人の作品を読んだほうがよほど解決の糸口が見つかると思います。それこそが今、開高作品を読むことの意義だと私は思います。

ビギナーのための

開高ファン11人による ブックガイド

小説、エッセイ、評論、ルポルタージュ……多彩な作品を遺した作家・開高健。
ファン11名に開高作品との出会いや、おすすめの1冊を伺いました。



『オーパ!』
集英社文庫

ピラーニヤ、トクナレ、ピラルク。驚きに満ちたブラジル・フィッシング旅。



RAPPER, BEATMAKER, 釣り人
田我流さん

1982年生まれ。

“危機と遊びが男を男にする”。その言葉
を体現した漢、開高健。金字塔的“輝け
る闇”の著者と同時に、日本中の釣り人
の心に“ロマン”の3文字を刻み込んだ
犯人でもある。簡潔に言おう。この本は
冒険書であり、哲学書だ。魚を追世界
中の秘境を駆け回り、釣れるまでひたす
ら待ち、飯を喰い、酒を飲む。その間に
浮かんだ感情や想い、旅先の景色、文化
(衣食住)、生態系、それを天才的文章力で
氏が言語化する。フィクションでは描き
きれないこの世界が、脳内に地平線の上
に広がる。世界が新鮮に見えるなくなっ
た男達、本書を読んで旅に出よ。



『オーパ!』
集英社文庫

褐色の甘い大河アマゾン。驚きを求めてさまよう60日16,000キロの旅。



探検家・作家
角幡 唯介さん

1976年北海道生まれ。『空白の五マイル』で開高健ノンフィクション賞受賞。近著に『裸の大地 第二部 犬糧事始』など。

若い頃は『夏の闇』や『輝ける闇』が好きでしたが、40をすぎて釣りをはじめてから開高健の釣り文学の魅力がわかってきました。釣りは魚だけを相手にするのではなく、その魚を生み出した大地や、魚をとりまく人々の文化をうけとめる行為であります。冒頭、蛇足の章にある「釣り竿を手にした旅だ」と、ただの旅では見えないもの、見られないものが、じつにしばしば、見えてくるものである。」との言葉に開高さんの釣りの思想の真髄が表現されていると思います。



『地球はグラスのふちを回る』
新潮文庫

世界の酒場を巡歴した著者が出会った忘れ難き名酒・珍酒を紹介。



Bar Kokage
高橋 恵末さん

1984年生まれ。医療機器メーカーの営業職からkokageのバーテンダーに転身。バーテンダー歴12年。

新人バーテンダーの頃、師匠からいただいたで最初に読んだ開高さんの本が『地球はグラスのふちを回る』。当時はお酒の勉強に追われ、ウイスキーのテイスティングの難しさに悩んでいたときだったので、開高さんのユーモア溢れるお酒の鑑賞や、「味覚は個人の主観」という言葉に触れて、バーテンダーとして生涯お酒と共に歩んで行けそうな気持ちになりました。今ではどこか旅に行くときは、この本を旅の道連れにしています。この文章を書いている今も私は旅の真つ最中。喫茶店でミツマメを食べながら、夜はどんなお酒に出合えるかワクワクしております。



『パニック・裸の王様』
新潮文庫
『裸の王様・流亡記』
角川文庫

戦後、急速に組織化し人間性を失っていった社会を痛烈に批判した短編小説集。



サン・アド
コピーライター
岩崎 亜矢さん

1977年生まれ。コピーライター/クリエイティブディレクター。主な仕事にGINZA SIXネーミングなど。

人間って、なんだ。開高さんの文章を読むたび、彼が抱く人間へのなにやら大きな諦めと、それでいてどうやってても諦めきれない執着を受け取る。その言葉は強く、鋭く、震えながら喉元をとらえ、心臓を押し掴む。リズムの良さゆえか、とても映像的であり、「読んでいる」というより「眺めている」気分をもたらす。あなたがまだ開高健に触れておらず、ひとなめ味わってみたいなら、「パニック」「裸の王様」「流亡記」、まずは3つの短編を。コピーライターならではの俯瞰の視線で、気づけば見知らぬ場所へと連れ出されることでしょう。



『舞台のない台詞：
気ままな断片 401』
新潮文庫

釣り・旅・食・酒の飽くなき獵人開高健の決定版アフォーリズム。401の断章。



古書かいた
和田 健さん

1993年生まれ。自分の名前の由来が開高さんなので、お店の名前も開高さんからいただきました。

開高さんの本はどれも僕にエネルギーをくれるような気がします。この本は開高さんの名文や名言をまとめてくれている一冊です。頑張りたいたいときや少し元気が欲しいときにこの本をひらくと、エネルギーをもらえるような文章、身の程を知らせてくれるような文章などに合えていつも重宝しています。20代で古本屋を開き30の歳になりましたが、「漂えども沈まず」の精神でこの時代と闘ってきたいと、この本をめくりながら思っています。



stacks bookstore
山下 丸郎さん

1982年生まれ。東京育ち。紆余曲折を経て、現在は神田神保町にて、酒の呑める書店を営む。



『瓶のなかの旅
酒と煙草エッセイ傑作選』
河出文庫

少年時代に出会ったバクダンとシケモクの味、中国での珍酒の話などが満載。

銀座のあるバーに置いてあった、サントリーの「豆本」こと「洋酒マメ天国」ではじめて開高さんの仕事に触れました。まだ日本が海外の情報になかなか触れることができなかった時代に、世界各地を旅して周り、酒を呑み、煙草を喫み続けて来た開高さんは酒に関する随筆をたくさん残しています。「瓶のなかの旅 酒と煙草エッセイ傑作選」に収録された、「弔む」という一編にある、「酒を飲む」ということは、つまり、人の魂をひきだしてやることなのだというのが古今の万国のドリンクーたちの信条である」という一文には、若輩者ながら同じ酒呑みとしてハッとさせられました。今夜も開高さんに、献杯。



『ずばり東京』
光文社文庫

1960年代前半、東京五輪に沸き立つ首都の変容を描いた著者渾身のルポ。



LINE ヤフー株式会社
Yahoo! ニュース本部
藤原 光昭さん

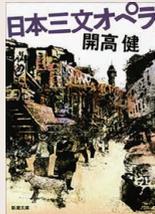
1982年生まれ。IT企業での経験を活かし、記念会実行委員として公式HPなどのデジタル施策を担当。

20年前、開高健と出会ったのはじめての作品。60年代前半の東京がいくつもの文体とユニークな表現で描かれており、これほど自由演技なルポルターージュが世にあるのか、と当時記者を志していた私は大きな衝撃を受けた。高度経済成長に東京オリンピック、時代や人々が熱くうねるその中心を、どこか冷めて皮肉っぽく、けれども茶目っ気と好奇心と庶民的な眼差しで描いた唯一無二の観察日記。あれから60年経ったが、この国の首都、東京の本質はほとんど変わっていないだろう。この作品を読んでから、若い私はいまも記者を目指さなくなった。



読売広告社
統合クリエイティブセンター
糠塚 まりやさん

1988年生まれ。広告会社でプランナー職。たまに短い映像の脚本を書いたりする。食べることに犬が好き。



『日本三文オペラ』
新潮文庫

大阪・旧陸軍工廠の莫大な鉄材を盗み出せ！泥棒集団「アパッチ族」を描く快作。

私はまだ開高さんの本を読み始めて日が浅い人間です。読み始めた頃は、「暑苦しい文章を書く人だな」と思っており、正直読みづらいと感じていました(こんな場ですみません(笑))。ですが、何冊目か手に取った『日本三文オペラ』で、私はその暑苦しさが癖になってしまいました。登場する人間たちへの愛がこつてりと描かれ、それが自分の中では、この暑苦しじやないと感じられないものに思われたのです。文章ではなく、すべてジリジリとした太陽の下でのできごとのように憶えている本です。こんなに暑苦しく愛を感じる本は、他にありません。



『青い月曜日』
集英社文庫

中学生で父を失った不安と人生への希望。宿酔の青春時代を描く自伝的小説。



編集・ライター
小元 佳津江さん

1976年生まれ。出版社編集職勤務を経て2009年よりフリーランス。書籍・雑誌・WEB等で制作・執筆に携わる。

開高さんの執筆時期は高度経済成長長期にあたり、エッセイなどは華やかで豪快な内容も多いですが、本書は開高さんの少年期から小説家デビュー前の話。12歳で家長となった開高さんが戦前戦後の壮絶な貧困のなか、多感な時期に何を見ていたのか。のちに数々の傑作を生み出す開高さんのベースを知ることができるのが、本書の魅力の一つです。個人的には、本書であまりに開高さんに入り込んで読みすぎた私は、とある驚きの越境体験をしました。でもそれは開高さんの圧倒的な筆力あってこそ。本にはこんなこともできるんだ、と教えてもらった一冊です。



つり人社
つり人編集部 書籍担当
小野 弘さん

1965年生まれ。1946年、月刊『つり人』創刊以来「釣らう、無心の姿で。」を掲げる釣り専門出版社の編集者。



『フィッシュ・オン』
新潮文庫

アラスカ・西ドイツ・ナイゼリア・最後は日本……世界10か国での釣り紀行。

14歳のとき母の本棚で発見した僕の「はじめての開高健」。「地図をひろげる。」という最初のアラスカの章の一文で全部もつていかれた。釣りをしない母の本棚にあったことや釣り好きの息子に勧めなかったのも謎だが、母はたぶん芥川賞作家の不思議な書名に惹かれたのと、息子には自然に出会わせたかったのだと思う。今年、開高健特集ムック『Ony Take on Angels』編集を担当。同氏の直筆原稿を掲載し、記念イベントでは『フィッシュ・オン』最終章・日本(銀山湖)の「縮んだ60cmイワナ」釣りシーンを収めた幻の8ミリ上映の機会に恵まれ感無量でした。



『新しい天体』
ちくま文庫

「景気調査」で食べて食べて食いまくれ！1970年代を疾走する食レポ紀行。



池内書房
池内 健さん

1967年生まれ。東京・神保町でミニ書店を運営する。ヨーロッパ大陸の歴史と文化に憧れている。

余った国家予算を食いつぶすため下級官僚がひたすら全国のうまいものを食べ歩く。国民をないがしろにした税金の使い方を批判する狙いもあったのでしようが、はじめて読んだ大学時代には、とにかく贅沢なグルメの世界に酔いしれました。就職して仕事に慣れた2年目の夏休み、三重・松阪まで車を飛ばし、「和田金」のすき焼きを食べたのも、小説内の描写がおいしそうであんなに食べたからです。開高そっくりの主人公はストイックとも言える姿勢で食べ歩いた末、本当においしいものにとどります。それは何か。ぜひこの本で確かめてください。

3 大阪府

大阪市 旧制天王寺中学校
(現・天王寺高校)

大阪市 大阪市立大学
(現・大阪公立大学)

開高の母校。大阪市立大学はJR杉本町駅前にあり、現在は大阪公立大学杉本キャンパスとなっています。

東住吉区 開高健の文学碑



小学生から大学生までの多感な時期を過ごした実家の近くに立ち、自伝的小説『破れた繭 耳の物語1』の一章が刻まれています。この一帯は大阪市中心部にも通いやすい便利な住宅地ですが、開高が住み始めた当時は畑、水田、空き地、草むら、川、池がいたるところにある自然豊かな郊外でした。(近鉄北田辺駅前)

茅ヶ崎市

開高健記念館



開高が1974年から1989年に亡くなるまで暮らした終の住処。2003年から一般公開しています。書斎は当時のままで、必見です。パイプや釣り具などのコレクションも年2回の企画展で随時紹介しています。毎週、金・土・日・祝祭日に開館。臨時休館日あり。(JR茅ヶ崎駅からバスで15分、徒歩なら25分)



4 福井県



坂井市

開高健の文学碑 「悠々として急げ」

祖父母と父の出身地という縁で、「一本田福所集落生活改善センター」の前に建てられました。周囲は水田地帯で、祖父母らの実直な暮らしがしのべられます。坂井市はプロレタリア文学で有名な作家中野重治(1902～1979年)が生まれ育った地でもあり、開高は誇りを感じていました。(JR芦原温泉駅から車で10分)

魚沼市

開高健の文学碑 「河は眠らない」

山深い奥只見の自然を愛した開高は、釣り人による乱獲から溪流を守ろうと「奥只見の魚を育てる会」の会長を買って出ました。会の活動により北ノ又川の上流は全面禁漁区に指定され、魚の産卵場所の保全につながりました。この巨大な碑はその功績を今も静かに伝えています。(JR小出駅から車で40分)



5 新潟県

開高健ゆかりの地は国内外に数多くあります。その中でも特に関係の深い国内スポットを厳選してご案内しましょう。

行ってみたい！ 開高健を訪ねて

2 神奈川県

鎌倉市

円覚寺 開高一家のお墓

元寇を退けたことで知られる鎌倉幕府執権の北条時宗が建てた臨濟宗の名刹。開高一家のお墓は山門近くの松嶺院の高台にあります。開高は晩年、チングス・ハーンの墓所を探すことに執念を燃やしました。モンゴルゆかりの寺にお墓を持つことができ、開高の妻・牧羊子はとても喜んだとか。(JR北鎌倉駅から徒歩1分)



1 東京都

杉並区

開高健記念文庫

2017年にオープンし、開高の蔵書約4,000冊を公開しています。もともとは、開高が芥川賞を受賞した1958年から茅ヶ崎に転居するまでの16年間を過ごした2階建ての自宅でした。開館日と時間、来館予約については、「開高健記念会」HP(最終ページ)でご確認を。(西武新宿線井荻駅から徒歩7分・事前申込制)

知ってる？知らない？

かい こう たけし

開高健って、 どんな人？

1930年大阪府生まれ。大阪市立大学卒。満12歳で父を亡くして家長となり、14歳で敗戦。大学生で父となり、結婚。23歳で壽屋（現サントリー）宣伝部に入社し、広報誌『洋酒天国』を企画、大ヒットさせる。26歳で小説『パニック』を発表、翌年『裸の王様』で第38回芥川賞受賞。33歳で朝日新聞社臨時海外特派員としてベトナム戦争に従軍。『ロビンソンの末裔』『輝ける闇』『夏の闇』などの小説で文学界に輝かしい業績を築く一方、ルポ『ベトナム戦記』や釣り紀行『オーパ！』など、ノンフィクションの傑作も残した。酒や食に関する名エッセイも多く、食通でも知られる。日本文学大賞ほか受賞多数。"行動する表現者、として旺盛な探究心で精力的に活躍したが、食道癌により58歳で永眠。そのスケールの大きな生き方と、強烈にして繊細な文章世界は今なお多くの人を魅了し続けている。



開高健記念会
ホームページ
<https://kaiko.jp/>



開高健記念会公式
フェイスブック
<https://www.facebook.com/kaikotakeshi/>



開高健オリジナルグッズ
公式販売サイト
https://peraichi.com/landing_pages/view/kaikotakeshigoods



開高健ノンフィクション賞 主催 / 株式会社集英社・公益財団法人一ツ橋総合財団

ルポルタージュ文学の傑作「ベトナム戦記」「フィッシュ・オン」「オーパ！」をはじめとする作品群で日本のノンフィクション文学に大きな足跡を残した同氏を記念し、「開高健ノンフィクション賞」を創設しました。従来の枠にとらわれない、広いジャンル、自由なものの方・方法によるノンフィクション作品を募っています。

受賞作 正賞 = 記念品
副賞 = 300万円
(単行本化の際は別途印税)



詳細は下記サイトをご参照ください。
<https://gakugei.shueisha.co.jp/kaikosho/>